

東晋の僧伽提婆の研究
訳経者

畝部俊英

目次

序

- 一 「僧伽提婆伝」の検討
 - 二 僧伽提婆の経典翻訳観
 - 三 『鞞婆沙論』所引の「中阿含」
 - 四 僧伽提婆の訳語
- 結

序

先に発表した拙論、「竺仏念の研究―漢訳『增耄阿含経』の訳出をめぐって―」^①において、中国訳経史研究は経序、経録等の外的資料と経典そのものの訳語訳文という内的資料とを照し合わせることによって、初めてより正確なる成果が得られるということを、竺仏念の訳語調査を通して、不十分ながら提示してみた。

経序、経録等の外的資料による訳経史研究はこれまで比較的よく進められているが、経典そのものの訳語訳文の

研究はまだ未開拓のまま残されている。^③ 失訳経典等も含めて一切経の訳語訳文を調査整理することによって、いかなる結果が得られるかも、今後の研究に委ねられている。

しかし少くとも前秦から後秦にかけて訳経に活躍した竺仏念に関する限り、彼の訳出した經典の訳語を調査することによって、彼特有の訳語が見出されることを知ることができた。

普通の仏教梵語で *san'yak* なる語のつく、*san'yagdisi* などのいわゆる八正道を「等見・等治・等語・等業・等命・等方便・等念・等定」——これを仮りに「等見型の訳語」とよぶ——というように訳すのは、いかなる理由によるかは別として、竺仏念が訳出に関係している經典のみに限られている。^④ しかもこれらの經典の誦出者は經典によってまちまちである。この事実からするならば、經典を翻訳したのは誦出者ではなく、訳出者である竺仏念であることを認めねばならないと思う。

これは至極当り前の事であるが、不思議な事にも、これまでの訳経史では、誦出者が訳主ということであろうか、いつの間にか訳出者の如く扱われるようになり、実際の訳出者である竺仏念は陰にかくれてしまつて、経録等によつては、竺仏念が訳出した經典であるにもかかわらず、全く竺仏念の名前は消えてしまつてゐる。

竺仏念のみならず一般に、従来の訳経史においては、誦出者と訳出者の区別はほとんどなされず、誦出者を訳者にしてゐる。勿論誦出者であつて、中国語に訳出することのできた人もあつたし、また誦出者といつても、必ずしも暗誦者ということでなく、印度西域から将来せられた仏典の原本を誦誦する人の意味にも使われている場合もあるようであるが、東晋、前秦、後秦の時代の訳経の際の信頼できる記録を見ると、どうしても次のように考えられ

る。

当時の仏典誦出者は印度西域地方より、身命を賭して長い困難な砂漠の旅のはてに、中国へ到達する。大低、長安に迎えられ、經典を誦出することを請われる。そこで、彼等はその懇願に応じて、暗誦によって修得している自分の最も得意としている経律論を誦出するのである。暗誦であるから時には忘れてしまっていて、誦出できない箇所もあったことを記録はとどめている^④。また暗記ということは、限度があるのであるうか、各誦出者ともあまり多くの經典は誦出していない。大低の場合、一、二の經典のみしか誦出していないようである。

経序等によれば、經典誦出者が長安に来詣すると直ちに請われて誦出がはじまり、經典翻訳の事業が行われる。従って誦出者は片言の中国語ぐらゐは長い道中のうちに習得することができたかもしれないが、恐らく經典を自ら中国語に翻訳するだけの能力はまだない。そこに通訳を兼ねた中国語へ經典を翻訳する訳出者がどうしても必要である。このような通訳として、西域に近い地方である涼州出身の竺仏念等は、經典訳出の役にも推されたのである。この場合には、竺仏念等の通訳者が明らかに訳出者でもあった。釈道安のいくつか残されている経序並びに現存最古の経録である僧祐の『出三藏記集』には、誰が「口誦胡本」し、誰が「訳出」に当たったかを明記している。所が『出三藏記集』より後の他の経録類では誦出者を訳者として扱い、実際の訳出者は遂に経史の陰にかくれてしまったのである。

このような扱い方は、今日に至るまで経史研究に受け継がれているが、これでは十分な成果が得られるとは到底考えられない。近代の学者の研究でも、この誦出者と訳出者の問題が明瞭でないため、訳出者について思わぬ間

違った取り扱いをしていることがあるのである。この拙論においては、長安にて釈道安を中心にして、訳経事業が進められ、竺三仏念が經典訳出に活躍していた頃、建元十九年（西歴三八三）、罽賓からやってきた僧伽提婆を取り上げ、経序、経録等の外的資料の記録するところと彼の訳出した經典の訳語訳文を照し合わせることによって、上來述べてきた誦出者と訳出者の問題等を含めて、初期訳経史研究にとって基本的な重要な課題について、少しばかり考究してみたいと思う。

註（敬称はすべて略す）

- ① 『名古屋大学文学部研究論集』I、哲学一七（一九七〇年三月）三頁―三八頁。
- ② 最近出版（昭和四十六年三月五日、第一刷発行）せられた宇井伯寿『訳経史研究』に示されているような研究成果の基礎の上に、訳語訳文の研究は進められなければならないであろう。
- ③ 前掲拙論、二七頁―二八頁。
- ④ 釈道安「鞞婆沙序」（『大正藏』五五卷七三頁下）、釈道安「阿毘曇序」（『大正藏』五五卷七二頁中）参照。

一 「僧伽提婆伝」の検討

先づ僧伽提婆を『出三蔵記集』卷第十三に記載する「僧伽提婆伝」^①によって紹介しよう。慧皎の『高僧伝』に収められている「僧伽提婆」^②伝も、ほとんどこの伝記を踏襲しているので、まとまった僧伝としては、『出三蔵記集』の「僧伽提婆伝」が最も適当であろうと思うからである。

この「僧伽提婆伝」はよくまとめられているが、釈慧遠等の経序中に散見する僧伽提婆に関する記述と対照して

みると、ほぼそれらの経序の記述に依拠したものであることがわかる。従って経序等の資料と「僧伽提婆伝」と対照して読んでみると、その背景と問題点がより鮮明に、より詳細に浮び出てくる。

ここでは、その背景と問題点のうちより、訳経史関係のものに焦点をしばって、逐次検討していきたい。

「僧伽提婆伝」は少しばかり長文であるから、区切って読み進んでいくことにする。文頭に出す番号は、筆者が整理のために付したままである。

(一)僧伽提婆、罽賓人也。姓瞿曇氏。入道修学、遠求明師。兼通三藏、多所誦持。尤善阿毘曇心、洞其緘旨。常誦三法度、夙夜嗟味、以為道之府也。為人俊朗、有深鑒、儀止温恭。務在誨人、恂恂不息。

僧伽提婆(Saṅghadeva)^④は西北印度の罽賓の出身であり、姓は瞿曇とあった。彼は出家し学を修め、遠く諸方にすぐれた師を求め、三藏に通じ、多く誦持する所あり、その中でも最も阿毘曇心論を善くし、また常に三法度論を誦し、夙夜に嗟味し、これを「道之府」としていた。人となりは俊朗、深鑒あつて、起居振舞いは温恭、人を誨うることを務めとして、恂恂として怠らなかつた。

ここは、釈慧遠の「三法度序」^④に拠っているようである。僧伽提婆に親しく教えを仰いだ慧遠の次の記述は、最も信頼できるものであろう。

有遊方沙門、出自罽賓。姓瞿曇氏。字僧伽提婆。昔在本國、預聞斯道、雅翫神趣、懷佩以遊。其人雖不親承二賢之音旨、而諷味三藏之遺言。志在分德、誨人不倦。

釈道安の「阿毘曇序」^⑥や釈道慈の「中阿含経序」^⑥にも「罽賓沙門僧伽提和」とある

から、僧伽提婆の出身地は確実に罽賓である。

所で「僧伽提婆伝」に「尤善阿毘曇心、洞其緘旨」とあることについては、一考を要する。阿毘曇心論を善くしたことは勿論であろうが、彼が最も得意としたのは、説一切有部の根本論書に当る阿毘曇八健度論、即ち毘智論であった。このことはまぎれもなく僧伽提婆は罽賓の説一切有部の中心的教学を学んだ者であることを示している。

道安の「阿毘曇序」は次のように述べている。

以建元十九年罽賓沙門僧迦禰婆誦此經甚利、來詣長安。比丘釈法和、請令出之。仏念訳伝。慧力・僧茂筆受。和理其指帰。自四月二十日出、至十月二十三日乃訖。

「誦此經甚利」なる僧伽提婆は、建元十九年（三八三）、長安に來詣するや、最も得意とするこの阿毘曇八健度論を請われて誦出した。

所がこの「阿毘曇序」を読み進んでみると、「其人忘因縁一品」とあって、僧伽提婆は「因縁一品」を忘れてしまっていて、どうしても誦出できなかったという。この「因縁一品」は後に曇摩卑に誦出してもらって、僧伽提婆は追加訳出することができるのであるが、この「忘」ということによって、この論は彼が胡本を携えてきたのではなく、暗記していたものを誦出したことが知られる。

この「忘因縁一品」ということがあってであろうと思われるが、僧伽提婆にとってこの阿毘曇八健度論の誦出こそは、長安における初めての訳経事業への参加という記憶されねばならぬ事柄であるのに、「僧伽提婆伝」はまったくこれを無視している。

しかしたとえ「僧伽提婆伝」にこの事は述べられていなくとも、道安の「阿毘曇序」において「僧伽提婆誦此經甚利」とせられ、長安に到着するや、僧伽提婆はこの論を最初、誦出したということは注意せられなければならない。

(二)符氏建元中入関、宣流法化。初安公之出婆須蜜經也、提婆与僧伽跋澄、共執梵文。後令曇摩難提出二阿含。

符氏建元中（三六五—三八四）に僧伽提婆は入関したとあるが、先に引いた「阿毘曇序」には、建元十九年（三八三）、長安に来詣したとある。

「初安公之出婆須蜜經也、提婆与僧伽跋澄、共執梵文。」とあるのは、未詳作者（恐らく道安）の「婆須蜜集序」^⑧に拠っている。

罽賓沙門僧伽跋澄、以秦建元二十年、伝此經一部、来詣長安。武威太守趙政文業者学不厭士也、求令出之。仏念訊伝。跋澄・難陀・掃婆三人執胡本。慧嵩筆受。以三月五日出、至七月十三日乃訖。

この「婆須蜜集序」によれば、僧伽提婆と同様、罽賓出身の沙門である僧伽跋澄が、建元二十年（三八四）、この尊婆須蜜菩薩所集論一部を伝えるべく、長安に来詣していた。

趙政の請いによって、誦出がはじまる。仏念が訊伝に当り、僧伽跋澄、曇摩難提、僧伽提婆の三人が誦出された胡本（梵文）を執り、慧嵩が筆受の任に当った。

「僧伽提婆伝」では「初安公之出婆須蜜經也、…」と「初」を、「後令曇摩難提出二阿含」の「後」と対応してあり、いかにも僧伽提婆が「初」めてこの婆須蜜經の「執梵文」に僧伽跋澄等と共に参加したようにも見られやすが、先ほど「阿毘曇序」によって知られたように、建元十九年、阿毘曇八鍵度論を誦出したことが、僧伽提婆に

とって長安における初めての訳業参加であった。

もう一度ここで「阿毘曇序」にもどってみよう。

長安に到着した建元十九年には、僧伽提婆は中国語をまだ十分身につけていなかったようである。だから彼の誦出したものを、竺仏念が訳伝したのである。

所が「其人檢校、訳人頗雜義辭」と「阿毘曇序」に見える如く訳人である竺仏念の訳出したものを、「其人」、即ち僧伽提婆が「檢校」したというところからすると、僧伽提婆はこの論の訳出に加わっている釈道安や法和と片言の会話ぐらいはできる程度には、長い旅のうちに中国語を身につけていたから、訳伝せられたものを「檢校」し、「訳人頗雜義辭」と指摘することができたのであろう。この阿毘曇八犍度論は、僧伽提婆の「訳人頗雜義辭」の指摘によって、訳し直された。

ともあれ、建元十九年、僧伽提婆は長安に来詣し、彼の最も得意とする阿毘曇八犍度論の誦出を直ちに請われ、仏典を中国語に翻訳する事業に初めて参加した。

なお「僧伽提婆伝」には、「出婆須蜜經也、提婆与僧伽跋澄、共執梵文」とあるけれども、難陀（恐らく曇摩難提）も加わっていて、「三人執胡本」であったことが、「婆須蜜集序」には述べられている。

僧伽提婆は長安に到着した翌年も、「執梵文」の役をしていることも注意される。

(三)時有关容之難、戒世建法、倉卒未練。安公先所出阿毘曇・広説・三法度等諸經、凡百余万言、訳人造次、未善詳審、義旨句味、往往愆謬、俄而安公棄世、不及改正。

建元二十年、慕容冲は長安を攻め、姚萇を破るといふ「慕容之難」が起る。

しかし未詳作者（恐らく道安、元明二本では道安法師とある）の「僧伽羅刹經序」^⑨によれば、

正值慕容作難於近郊、然訳出不裏。余与法和対檢定之、十一月三十日乃了也。此年出中阿含六十卷、増一阿含四十六卷。伐鼓擊析之中而出斯百五卷、窮通不改其恬。詎非先師之故迹乎。

とあり、また釈道安の「増一阿含序」^⑩によれば、

此年、有阿城之役、伐鼓近郊、而正専在斯業之中、全具二阿含一百卷・鞞婆沙・婆和須蜜・僧伽羅刹伝。とある如く、訳経事業は「伐鼓近郊」の中、それを物ともせず、どんどん進められた。

「安公先所出」以下の記述は、釈道慈の「中阿含經序」に拠っているから、次に「中阿含經序」を見てみよう。

中阿含經記云、昔釈法師、於長安、出中阿含・増一・阿毘曇・広説・僧伽羅叉・阿毘曇心・婆須蜜・三法度・二衆從解脫縁。此諸経律凡百余万言、並違本失旨、名不当実、依怙属辞、句味亦差。良由訳人造次、未善晋言、故使爾耳。会燕秦交戦、関中大乱。於是良匠背世。故以弗獲改正。

「僧伽提婆伝」のこの箇処は、まったくこの「中阿含經序」によって述べられていることが明瞭である。

従って、且らくこの「中阿含經序」中に「昔安法師、於長安、出中阿含・増一……」とあることについて取り上げてみよう。

「安法師」とあるのは勿論、釈道安のことである。

釈道安は、生涯を尽くしての仏教の研究と教化実践の結果、中国の仏教を真に育成し開花結実させるためには、

まだ十分伝えられていない印度西域の仏典を大乘小乘を問わず請来し、中国語に翻訳することが、最も先決の重要事であることを自覚し、晩年から没するまで、戦乱の長安にありながら、ただ一筋に諸経律論の翻訳事業に打ち込んだのである。

「比丘大戒序」^⑦によれば、道安が長安に迎えられたのは、「至歳在鶉火、自襄陽、至関右」と自から記しているが、湯氏が既に指摘しているように、もし道安が苻堅の軍勢に獲えられて長安に入った年とするならば、「鶉火」(三七〇)は正しくなく、「鶉首」(三七九)とするのがよいとする説^⑧に従う。

比丘大戒訳出のため、鶉火の歳(三七〇)、道安はわざわざ長安方面に向いたと見るならば、この歳星のままでもよいわけであるが、比丘大戒と訳者こそ異なるが、曇摩侍の読誦、仏念の執胡、慧常の筆受と比丘大戒とまったく同じ人々によってなされた比丘尼大戒関係のものの訳出が、「太歳己卯」(三七九)または「建元十五年」(三七九)とあることからするならば、比丘大戒も同じ年、即ち建元十五年に訳出されたと見る方がやはりよいようである。

従って、建元十五年、長安に迎えられるや、道安は彼の余生のすべてを尽くして訳経事業に打ち込み、かつて経録を作った経験からであろうと思われるが、後世に正確な記録を残すため、自から筆を取って、次々と訳出される經典に経序を付した。

先づ長安に入った年、比丘大戒と比丘尼大戒関係のものが訳出され、以後どんどんと訳経事業は進められるのであるが、次に経序等によって、道安が没するまでに長安にて訳出された經典を年月順に整理してみよう。

(1) 比丘大戒(欠)

釈道安「比丘大戒序」

○三七九年夏―冬。

○曇摩侍誦出。

○竺仏念、梵文を写す。

○道賢、訳を為す。

○慧常筆受。

(2) 尼受大戒法（授比丘尼大戒）（欠）

「関中近出尼二種壇文夏座雜十二事并雜事共卷前中後三記」のうち卷の中間の「尼受大戒法後記」

○僧純・曇充、拘夷国にて、高德の沙門仏図舌弥より比丘尼大戒及び授戒法を得る。

○仏図卑、訳を為す。（受坐己下、劍慕法に至るまで）

○曇摩侍伝。

「関中近出尼二種壇文夏座雜十二事并雜事共卷前中後三記」のうち卷後の記

○三七九年十一月五日。

○僧純・曇充、丘慈の高徳の沙門仏図舌弥より授大比丘尼戒儀を得る。

○曇摩侍出。

○仏図卑、訳を為す。

○慧常筆受。

(3) 二歳戒儀（受坐より囑授諸雜事に至る）（欠）

「関中近出尼二種壇文夏坐雜十二事并雜事共卷前中後三記」のうち巻後の記

○三七九年十一月五日。

○僧純・曇充、丘慈の高徳の沙門仏図舌弥より二歳戒儀（受坐より囑授諸雜事に至る）を得る。

○曇摩侍出。

○仏図卑、訳を為す。

○慧常筆受。

(4) 比丘尼大戒（欠）

「比丘尼戒本所出本末序」^⑧

○僧純、拘夷国に於てこの戒本を得来る。

○仏念・曇摩持・慧常伝。

「関中近出尼二種壇文夏坐雜十二事并雜事共卷前中後三記」のうち巻初の記

○三七九年十一月十一日―二十六日。

○僧純、亀茲の仏陀舌弥より戒本を得る。

○曇摩侍伝。

○仏念執胡。

○慧常筆受。

釈道安「比丘大戒序」

○僧純、丘慈国の仏陀舌弥より比丘尼大戒を得て、来りてこれを出す。

「案」―「中阿含経序」のうちに「二衆從解脱縁」というものが見えるが、湯氏はこれに「僧尼戒本」と細註し、常盤博士は以上の(1)、(2)、(3)、(4)の比丘大戒、比丘尼大戒関係のものを合していうのではないかとせられた。^⑭恐らくそうであろうと思う。

なお慧常が筆受として、これらすべての訳出に關係していることは注目すべきである。慧常は「涼州道人釈慧常」^⑮といわれているように、涼州出身であり、釈道安の「合放光・光讚略解序」^⑯によれば、「至此、会慧常・進行・慧弁等、将如天竺、路経涼州、写而…」とあるように、天竺へ同志と共に求法の旅へ趣かんとしていた。ここには「至此」とあって、何年頃のことか示していないが、未詳作者の「漸備経十住胡名并書叙」に「涼州道人釈慧常、歳在壬申、於内苑寺中、写此経」と見えるから、少くとも壬申(三七二)の年には涼州にいて、『漸備経』を写し、また未詳作者の「首楞嚴後記」^⑰によれば、咸安三年(三七三)には、首楞嚴経の訳出に釈進行と共に立合ひ、『須頼経』、『光讚経』をも手に入れ、道安に送っている。これらの諸経は三七六年襄陽にいる道安のもとにあり前後して到着した。^⑱それから暫く経た三七九年には、慧常は長安の道安のところに姿を現わしている。

従ってこれらの記録に見える慧常と比丘大戒等の筆受者である慧常と「如是一人、則常等或未至天竺而返也」と

湯氏が述べる如く、もし同一人であるならば、天竺には至らずに、恐らく僧純、曇充等とどこかで出会い、彼が求めていた比丘、比丘尼戒本の善本が得られたことを道安と一刻も早く喜びたいとの心から、天竺行は取り止めて、僧純等をともない道安のもとへ引き返したのではなからうか。三七九年、ここに出した(1)、(2)、(3)、(4)の比丘、比丘尼戒本の訳出が行われ、慧常は筆受に当った。

(5) 摩訶鉢羅若波羅蜜經抄

道安「摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序」

〇三八二年。

〇天竺沙門曇摩裨執本。

〇仏護、訳を為す。

〇慧進筆受。

「案」―「中阿含經序」には、この經抄はあげられていない。常盤博士は現存の『摩訶般若鈔經』(『大正藏』八卷)に比定されているが、境野、小野両博士ともこの經抄は失われたと見ていられる。筆者は訳語訳文の点から何か手がかりを見出したいのであるが、今のところ検討中で、どちらとも決し得えないのが残念である。なお『出三藏記集』卷第二の代録や、『大正藏』の『摩訶般若鈔經』には、竺仏念が訳出に関係しているようになっていたが、道安の「序」では仏護が訳を為していることが明記されている。

(6) 阿毘曇心論(阿毘曇抄)(欠)

未詳作者「阿毘曇心序」

○釈和尚（道安）、昔長安にて鳩摩羅跋提に此経を出さしむる。

釈道安「鼻奈耶序」^⑧

○三八二年、夏。

○鳩摩羅仏提、阿毘曇抄を長安にもたらず。

「案」―「中阿含経序」のうちの「阿毘曇心」は、恐らくこの二つの「序」に見られるものであらうと思われる。

(7) 『四阿含暮抄解』〔大正蔵〕二五卷^⑨

未詳作者（恐らく道安）「四阿含暮抄序」^⑩

○三八二年、冬十一月。

○鳩摩羅仏提、執胡本。

○仏念・仏護、訳を為す。

○僧導・曇究・僧叙筆受。

釈道安「鼻奈耶序」

○三八二年、冬。

○鳩摩羅仏提、四阿含抄を長安にもたらず。

「案」―「中阿含経序」にはこれを「三法度」として上げている。

(8) 『鼻奈耶』(『大正藏』二四卷)³⁴⁾

釈道安「鼻奈耶序」

○三八三年一月十二日—三月二十五日。

○耶捨出。

○仏提梵書。

○仏念、訳を為す。

○曇景筆受。

「案」—「中阿含經序」にはこれをあげていない。

(9) 鞞婆沙論

釈道安「鞞婆沙序」³⁵⁾

○三八三年四月—八月二十九日。

○僧伽跋澄出。

○曇無難提、筆受して梵文と為す。

○弗図羅刹訳伝。

○敏智筆受。

「案」—「中阿含經序」のうちに「広説」とあるものが、これに当ると思われる。この拙論で後に取り上げる

が、この轉婆沙論は僧伽提婆によって改訳され、現存の『轉婆沙論』^⑩がそれであるが、『出三藏記集』卷第二の僧伽提婆の項には「轉婆沙阿毘曇十四卷」として記載されていて、その細註に「一名広説」とあるように、この轉婆沙論は広説ともいわれていたのである。湯氏もこのように理解している。^⑪

(10) 『阿毘曇八犍度論』(『大正藏』二六卷)

釈道安「阿毘曇序」

○三八三年四月二十日―十月二十三日。更に四十六日かけて訳し直す。

○僧迦禰婆出。

○仏念訳伝。

○慧力・僧茂筆受。

○法和、其の指帰を理める。

「案」―「中阿含経序」のうち「阿毘曇」といわれているものが、これに当るようである。道安の序も「阿毘曇序」となっている。阿毘曇の中心論書、発智論のことであるから、「阿毘曇」とも呼ばれたのであろう。『出三藏記集』卷第二の代録の僧伽提婆の項においては、「阿毘曇八犍度二十卷一名迦旃延阿毘曇、建元十九年出」^⑫といい、湯氏も「阿毘

曇八犍度」^⑬と細註を入れている。

なお「中阿含経序」によれば、この三八三年(建元十九年)に訳出された阿毘曇八犍度論は、僧伽提婆が後になつて中国語を身につけ、自から「更出」したとあるが、現存の『阿毘曇八犍度論』の訳語を調査してみると、竺仏

念獨特の「等見型の訳語」が残っている。従って「更出」といっても、全面的な改訳ではなかったと思われる。

(11) 『尊婆須蜜菩薩所集論』(『大正藏』二八卷)

未詳作者(恐らく道安)「婆須蜜集序」⁽¹⁴⁾

○三八四年三月五日―七月十三日。

○僧伽跋澄出。

○仏念訳伝。

○跋澄・難陀(恐らく難提)・掃婆執胡本。

○慧嵩筆受。

○余(恐らく道安)と法和、対校修飾。

○武威、小多潤色。

「案」―釈道慈の「中阿含經序」によれば、「唯中阿含・僧伽羅叉・婆須蜜・從解脱緣、未更出耳」とあり、後に僧伽提婆はこの中で『中阿含經』は更出したが、他のものは更出していない。この「中阿含經序」の記述は『中阿含經』更出が完成し、隆安五年(四〇一)、正写校定流伝することを得た時点での事であるが、現存『尊婆須蜜菩薩所集論』の訳語を調査してみても、竺仏念特有の「等見型の訳語」が見出されるから、結局、更出されずに、竺仏念訳伝のものが現存するのであろう。

(12) 中阿含經

未詳作者（恐らく道安）「僧伽羅刹經序」⁽¹⁴⁾

○三八四年。

○中阿含六十卷出ず。

釈道安「増一阿含序」⁽¹⁵⁾

○三八四年。

○全て二阿含一百卷等を具す。

「案」―『出三藏記集』卷第二の曇摩難提の項において、増一阿含經とともに「難提口誦胡本、竺仏念訳出」⁽¹⁶⁾と記述され、同じく『出三藏記集』卷第十五の「仏念法師伝」に「至建元二十年（三八四）、政復請曇摩難提出増一阿含及中阿含、於長安城内、集義学沙門、請念為訳。敷衍研覈、二載之訖。二含光顕、念之力也」とあって、中阿含經が建元二十年（三八四）、曇摩難提誦出、竺仏念訳出によって出されたことは間違いない。

所が「中阿含經序」にある如く、僧伽提婆によって改訳され、「准之先出、大有不同」といわれているように、すっかり更出せられ、それが現存の『中阿含經』⁽¹⁷⁾であり、先出の中阿含經の全体はいつの間にか失われ、極く一部分が単經として残存することを、水野博士は発表せられた。⁽¹⁸⁾

(13) 『僧伽羅刹所集經』(『大正藏』四卷)

未詳作者（恐らく道安）「僧伽羅刹經序」⁽¹⁹⁾

○三八四年十一月三十日、訳出了る。

○僧伽跋澄、この経本を長安にもたらす。

○僧伽跋澄出。

○仏念、訳を為す。

○慧嵩筆受。

○余（恐らく道安）と法和对檢しこれを定む。

未詳作者「僧伽羅刹集経後記」

○三八五年二月九日訖る。

○釈道安、趙文業、前年より修正。

「案」中阿含経序には「僧伽羅刹」とあるが、これも「婆須蜜」と同じく、『中阿含経』が改訳され、流传するを得えた時点（四〇一）において「未更出」といわれていて、現存の『僧伽羅刹所集経』の訳語を調査してみると、竺仏念独特の「等見型の訳語」が見出されるから、竺仏念訳出のものが改訳されずに伝わっているであろう。

(14) 『增言阿含経』（『大正蔵』二卷）

釈道安「増一阿含序」

○三八四年夏—三八五年春。

○曇摩難提出。

○仏念訳伝。

○曇嵩筆受。

○四十一卷（上部二十六卷、下部十五卷）

○下部の十五卷では録偏を忘失。

○余（道安）と法和、考正。

未詳作者（恐らく道安）「僧伽羅刹經序」

○三八四年

○増一阿含四十六卷出す。（三八四年に訳出された巻数か？）

未詳作者「僧伽羅刹集經後記」

○増一阿含、曇摩難提口誦。

○仏念、訳人と為る。

「案」―現存『増壹阿含經』について、曇摩難提訳か僧伽提婆訳か、近代の諸学者によってさえ、決着がつかないが、先に発表した拙論^⑧においては、現存『増壹阿含經』の中に竺仏念の独特の「等見型の訳語」が認められるから、竺仏念訳出のもの（曇摩難提誦出）に、誰か（僧伽提婆も含めて）が改訳の手を加えたとして、その誰かが不明であるから、最初の訳出者である竺仏念を訳出者とした方が適切ではなからうかという案を出しておいた^⑨。現在もその考えは変わらない。

なお水野博士は、現存『増壹阿含經』は僧伽提婆の改訳したものであらうとせられ、曇摩難提誦出の中阿含經と

同じく、曇摩難提誦出の増一阿含經も全体として失われてしまったが、単經として現に残存する經典を『大正藏』から取り出された。⁹⁸

以上、長安に迎えられてから没するまでの七年間に、道安が中心となって遂行した經訳事業によって訳出せられた經典のうち、記録によって知られるものを整理してみた。

これらの訳出せられた諸經律論は、「中阿含經序」に經名がほとんど上げられているが、摩訶鉢羅若波羅蜜經抄と『鼻奈耶』は見当らない。

所で「中阿含經序」によれば、「此諸經律凡百余万言、並違本失旨、名不当実、依倚屬辭、句味亦差」と批判せられ、それは「訳人造次、未善晋言、故使爾耳」と訳人が仕上げをいそぎ十分な中国語になしえなかったこと、「会燕秦交戰、関中大乱」、長安が戦乱のうちにあつて、じっくり腰を落ち着けて訳經事業に取り組めるような四囲の情況でなかったこと、「於是良匠背世」、しかもここにおいて、良匠、釈道安が亡くなった。このような事情が重なつて、これら諸經律論は改正することができなかったという。

中国仏教の基礎を確立した釈道安は、建元二十一年（三八五）二月、年七十四にして、長安において卒した。道安を長安に迎えた符堅も同年八月殺された。

さて更に『出三藏記集』の「僧伽提婆伝」に進むと、

(四)後山東清平、提婆乃与冀州沙門法和、俱適洛陽、四五年間、研講前經。居華歲積、転明漢語、方知先所出經多有乖失。法和歎恨未定、重請訳改。乃更出阿毘曇及広説。先出衆經、漸改定焉。

とある。

この箇処も、「中阿含経序」の記述を受けているので、「中阿含経序」を見てみる。

乃経数年、至閩東小清。冀州道人釈法和、罽賓沙門僧伽提和、招集門徒、俱遊洛邑。四五年中、研講遂精、其人漸曉漢語。然後乃知先之失也。於是和乃追恨先失、即從提和更出阿毘曇及広説也。自是之後、此諸経律、漸皆訳正。唯中阿含・僧伽羅叉・婆須蜜・從解脱縁、未更出耳。

「僧伽提婆伝」はまったくこの「中阿含経序」によって述べられていることが、両者を対照してみるとわかる。従って「中阿含経序」によって僧伽提婆の動静を見てみよう。

数年を経て、閩東はようやく少し動乱がおさまった。そこで釈法和と僧伽提婆は、同志を招集し、洛陽へ行く。彼地にて四、五年の間、研講遂精した結果、ついに僧伽提婆はだんだん中国語がわかるようになった。漢文が読めるようになったのであろうと思われる。そこで前に長安にて訳出された諸経の失を知り、法和達にそれを指摘した。法和はその先失を残念に思い、僧伽提婆に頼んで先づ『阿毘曇八健度論』と『鞞婆沙論』を更出してもらい、それから後、先出の諸経律もだんだんと皆訳正された。ただ中阿含経、『僧伽羅刹所集経』、『尊婆須蜜菩薩所集論』、『從解脱縁のみはまだ更出せられていなかった。

以下、中阿含経改訳の事が詳しく述べられるのであるが、それは後に取り上げることとして、ここに述べられている点について、もう一度振り返ってみたい。

僧伽提婆は洛陽に遊んで、四、五年中、「研講遂精、其人漸曉漢語。然後乃知先之失也」とあるが、この事は特

に注意せられねばならないであろう。

建元十九年（三八三）、長安に到着して阿毘曇八健度論を誦出し、翌建元二十年、『尊婆須蜜菩薩所集論』の訳出に執胡本の役にて参加した当時には、僧伽提婆はまだ中国語は十分わからなかったのである。

しかるに暫く中国に滞在するうちに、力を尽して中国語をマスターし、先出の諸經典の失を指摘することができるようになり、漢文が読めるようになり、ついに自から中国語にそれらの諸經典を更出することができるようになった。

ここに至って初めて訳出者としての僧伽提婆が誕生するのである。

当時、印度西域より多くの誦出者が中国へ来詣したが、恐らく僧伽提婆の如く中国語をマスターした人はあまりなかったのではなからうか。

ここでもう一つ注意すべきことは、僧伽提婆は中国語をマスターして、「更出阿毘曇及広説也。自是之後、此諸經律、漸皆訛正」とあり、「唯中阿含・僧伽羅叉・婆須蜜・從解脱縁、未更出耳」とあることである。

先に長安にて訳出された諸經律論のうち、記録によつて僧伽提婆の更出を確認できるのは、

(一) 『阿毘曇八健度論』

(二) 『鞞婆沙論』

(三) 『三法度論』

(四) 『阿毘曇心論』

(五) 『中阿含經』

の五つの経論である。しかもこの五つのうち、(一)の『阿毘曇八犍度論』の訳語には、前に述べた如く、竺仏念特有の「等見型の訳語」が残存している所からすると、全面的な改訳とは思われない。従って「更出」ということのかなには、ちょっと手を加えた程度から、『中阿含經』の如く「准之先出、大有不同」といわれているような全面的な改訳も含まれているのであろう。

「中阿含經序」の「自是之後、此諸經律、漸皆訳正」ということも、どこまでを「皆訳正」と認めるかというその判断の相違によって、いろいろ見解がわかれてくる。現存の『增壹阿含經』がその好例であるが、記録には増一阿含經の改訳について述べていなくともこの「此諸經律、漸皆訳正」の中に当然入るから僧伽提婆が改訳したのであるとする人と、よしや「皆訳正」の中に入っていないも、それはちょっと手を加えたにすぎぬから改訳した部類には入らぬとする人や、古くから現在に至るまでさまざまな見解が生れている。

ともあれ、僧伽提婆更出の事実の有無を決めるのは、信頼のできる記録と、やはり最後には訳語訳文ではなからうか。僧伽提婆の訳語訳文を調査整理することによって、どの程度まで、彼が更出したかを見極めることはできないであろうか。拙論においては、後に『鞞婆沙論』所引の「中阿含」と「准之先出、大有不同」といわれている僧伽提婆訳出の『中阿含經』の対応箇所を取り出して、僧伽提婆の訳語訳文を考察してみる。

「僧伽提婆伝」にもどる。

(四)頃之姚興王秦、法事甚盛。於是法和入闕、而提婆度江。先是、廬山慧遠法師、翹勤妙典、広集経蔵、虚心側

席、延望遠賓。聞其至止、即請入廬岳。以太元十六年、請訳阿毘曇心及三法度等經。提婆乃於波若台、手執胡本、口宣晉言。去華存実、務尽義本。今之所伝、蓋其文也。

姚興が秦に王となる（三九四）や、法事が甚だ盛んとなる。それより少し前、法和と別れた僧伽提婆は揚子江を渡り、先づ廬山の慧遠のもとに行き、太元十六年（三九一）、『阿毘曇心論』や『三法度論』等の經を訳出することを慧遠に請われ、手に胡本を執り、口に晉言を宣べて、訳出した。

この箇処は「阿毘曇心序」や「三法度序」に拠っている。

先づ釈慧遠の「阿毘曇心序」を見てみよう。

闕賓沙門僧伽提婆、少翫茲文、味之弥久、兼宗匠、本正闕、入神要。其人情悟所參、亦已涉其律矣。會遇來遊、因請令訳。提婆乃手執胡本、口宣晉言。臨文誠懼、一章三復。遠亦宝而重之。敬慎無違。然方言殊韻、難以曲尽。儼或失当、俟之來賢。幸諸明哲、正其大謬。晋太元十六年出。

慧遠の筆は、簡にして要を得ている。先づ僧伽提婆を紹介し、たまたま廬山に來遊した機会をとらえて、慧遠は僧伽提婆に『阿毘曇心論』の訳出を請うたことを述べ、その請いに応じて「手執胡本、口宣晉言」と僧伽提婆がすっかり中国語をマスターしていることを示し、「臨文誠懼、一章三復」と僧伽提婆が訳出に際し、いかに敬虔な態度で臨んだかを、活写している。太元十六年（三九一）に出すと最後の所で述べている。

『阿毘曇心論』には、もう一つ、未詳作者の「阿毘曇序」がある。要所だけを紹介してみよう。

釈和尚、昔在闕中、令鳩摩羅跋提出此經。其人閑晉語、以偏本難訳、遂隱而不伝。……訳人所不能伝者、彬

彬然。是以勸令更出。以晋泰元十六年、歲在單闕、貞于重光。其年冬、於尋陽南山精舍、提婆自執胡經、先誦本文、然後乃訳為晋語。比丘道慈筆受。至來年秋、復重与提婆校正、以為定本。……

この「阿毘曇心序」は未詳作者となっているが、文中に「比丘道慈筆受。至來年秋、復重与提婆校正」というところから推測すると、後に『中阿含經』更出の筆受となり、「中阿含經序」を書く道慈の作であろうと思われる。従って道慈は廬山から更に建康へと行く提婆に終始師事していたのであろう。

この「阿毘曇心序」によれば、次のようなことがわかる。

道安在世中、長安にて訳出された諸經典のうちにある阿毘曇心論は鳩摩羅跋提出であること、その訳本は偈が訳出されていなかったこと、僧伽提婆によってこの阿毘曇心論にはもともと偈があることが知られたこと、従って先所訳のものは不完全本であること、太元十六年(三九一)の冬から翌年の秋に至って定本が完成したこと、道慈が筆受したことなどである。

次に慧遠の「三法度序」から「僧伽提婆伝」と関連している箇所を取り出してみる。

有遊方沙門、出自罽賓。姓瞿曇氏。字僧伽提婆。……志在分徳、誨人不倦。每至講論、嗟詠有余、遠与同集、勸令宣訳。提婆於是、自執胡經、転為晋言。雖音不曲尽、而文不害意。依実去華、務存其本。

この文の最初のところは、既に「僧伽提婆伝」の(一)の箇所が拠っているところとして紹介した。ここの(五)の箇所の末尾はその続きの所に拠って述べられている。

この『三法度論』も慧遠が勸めて宣訳してもらったのである。訳出年は書いていないが、廬山での訳業であるか

ら、先の『阿毘曇心論』訳出の太元十六年（三九一）前後と見て大過はないであろう。「依実去華、務存其本」は「僧伽提婆伝」に「去華存実、務尽義本」という言葉で文中に取り入れられている。

「僧伽提婆伝」は次に僧伽提婆が建康へ行き『中阿含経』を訳出することを述べる。

(六)至隆安元年、遊于京師。晋朝王公及風流名士、莫不造席致敬。時衛軍東亭侯王珣、雅有信慧、住持正法、建立精舍、広招学衆。提婆至止、珣即迎請。仍於其舍、講阿毘曇。名僧畢集。提婆宗致既精、辞旨明析、振發義奥、衆咸悦悟。時王珣・僧弥亦在聽坐。後於別屋自講、珣問法網道人、僧弥所得云何。答曰、大略全是、小未精覈耳。其敷演之明易、啓人心如此。其年冬、珣集京都義学沙門四十余人、更請提婆、於其寺、訳出中阿含。闕賓沙門僧伽羅叉、執胡本。提婆翻為晋言。至來夏方訖。

僧伽提婆は廬山より更に建康へ行き、晋朝の王公及び風流の名士に迎えられ、阿毘曇を講じ、名声を博する。そして『中阿含経』を訳出するのであるが、それらのことについては「中阿含経序」に拠っているのであるから、それを参照してみよう。

僧伽提和、進遊京師、応運流化、法施江左。干時、晋国大長者尚書令衛將軍東亭侯優婆塞、王元琳、常護持正法、以為己任、即檀越也。為出經故、造立精舍、延請有道积慧持等義学沙門四十許人。施諸所安、四事無乏。又預請経師僧伽羅叉、長供数年。然後乃以晋隆安元年丁酉之歲十一月十日、於揚州丹楊郡建康県界在其精舍、更出此中阿含。請闕賓沙門僧伽羅叉、令講胡本。請僧伽提和、軫胡為晋。予州沙門道慈筆受。吳国季宝・唐化共書。至來二年戊戌之歲六月二十五日、草本始訖。此中阿含、凡有五誦、都十八品、有二百二十

二經、合五十一万四千八百二十五字、分爲六十卷。時遇国大難、未即正書。乃至五年辛丑之歲、方得正写、按定流伝、其人伝訳、准之先出、大有不同。

この「中阿含經序」によれば、僧伽提婆は隆安元年（三九七）に建康へ行ったのではなく、それより以前に建康に行き、法を江左に施し、王元琳が檀越となり、隆安元年十一月十日より、揚州丹楊郡の建康県界にある精舎において、『中阿含經』の訳出が始められたのである。

『中阿含經』の更出は、僧伽羅叉が胡本を講じ、僧伽提婆が胡を転じて晋言となし、道慈が筆受し、李宝と唐化が書して、翌隆安二年（三九八）六月二十五日に草本が初めて完成する。この『中阿含經』は五誦、十八品、二百二十二經、五十一万四千八百二十五字、六十卷である。即ち現存本と同じものである。国の大難に遇って、正書されなかつたので、隆安五年（四〇一）、正写按定し、流伝することを得えた。前に長安にて出された中阿含經と対照してみると、「大有不同」である。

記録によって知られる限りでは、この『中阿含經』訳出が、僧伽提婆にとって最後の訳業である。

「僧伽提婆伝」は最後に彼の徳を称揚して、

(b) 其在閩洛江左、所出衆經、垂百余万言、歴遊華戎、備悉風俗、從容機警、善於談笑、其道化声誉、莫不聞焉。

未詳其卒歲月。提婆或作提和、蓋音訛故不同云。

と述べている。彼の卒年月は不明であるが、記録の上からだけでも、三八三年から三九八年に及ぶ十六年の長年月、戦乱の中国において、中国語を自家葉籠中のものにし、数々の訳経をなし遂げたことは、仏教史上、不朽の功

續であらう。

註

- ① 『大正蔵』五五卷九九頁中—一〇〇頁上。
- ② 『大正蔵』五〇卷三二八頁下—三二九頁上。
- ③ 慧皎の『高僧伝』の「僧伽提婆」伝（『大正蔵』五〇卷三二八頁下）に、「僧伽提婆、此言衆天」とある。
- ④ 『大正蔵』五五卷七三頁上。
- ⑤ 『大正蔵』五五卷七二頁上。
- ⑥ 『大正蔵』五五卷六三頁下。
- ⑦ 未詳作者「八健度阿毘曇根健度後別記」（『大正蔵』五五卷七三頁中）参照。
- ⑧ 『大正蔵』五五卷七一頁下—七二頁上。
- ⑨ 『大正蔵』五五卷七一頁中。
- ⑩ 『大正蔵』五五卷六四頁中。
- ⑪ 『大正蔵』五五卷八〇頁中。
- ⑫ 湯用彤『漢魏兩晉南北朝仏教史』（台湾商務印書館発行、民国五十一年版）上冊一四二頁。
- ⑬ 横超慧日『中国仏教の研究』七九頁—八一頁。
- ⑭ 宇井伯寿『釈道安研究』三三頁。
- ⑮ 「関中近出尼二種壇文夏座雜十二事并雜事共卷前中後三記」（『大正蔵』五五卷八一頁中—下）。
- ⑯ 『大正蔵』五五卷七九頁下—八〇頁上。
- ⑰ 湯用彤、前掲書上冊一六四頁。
- ⑱ 常盤大定『後漢より宋齊に至る訳経総録』八一〇頁。
- ⑲ 未詳作者「漸備經十住胡名并書叙」（『大正蔵』五五卷六二頁下）にある。
- ⑳ 『大正蔵』五五卷四八頁上。
- ㉑ 『大正蔵』五五卷四九頁中。

- ②② 『大正蔵』五五卷六二頁下。
- ②③ 『大正蔵』五五卷八〇頁中、八一頁中一下。
- ②④ 湯用彤、前掲書上冊二七五頁。
- ②⑤ 『大正蔵』五五卷五二頁中一下。
- ②⑥ 常盤博士、前掲書八一九頁。
- ②⑦ 境野黄洋『支那仏教精史』二二〇頁―二二二頁。
- ②⑧ 小野玄妙『仏書解説大辞典』第十二卷総論七二頁。
- ②⑨ 『大正蔵』五五卷一〇頁中。
- ③① 『大正蔵』八卷五〇八頁中。
- ③② 『大正蔵』二四卷八五一頁上―中。
- ③③ 『大正蔵』二五卷一頁中―一五頁中。
- ③④ 『大正蔵』五五卷六四頁下。
- ③⑤ 『大正蔵』二四卷八五一頁中―八九九頁中。
- ③⑥ 『大正蔵』二八卷四一六頁上―五二三頁中。拙論「竺仏念の研究」においては、現存の『鞞婆沙論』を一応僧伽跋澄の項（拙論「竺仏念の研究」二〇頁―二二頁）で扱ってみたが、後に述べる如く『鞞婆沙論』所引の「中阿含」と僧伽提婆訳出の「中阿含経」の訳語訳文が一致することが判明したから、舟橋博士、常盤博士のいわれるように、現存の『鞞婆沙論』は僧伽提婆の更出で、僧伽提婆訳出といった方がよいように思われる。なお『鞞婆沙論』についてのこれまでの研究について、舟橋一哉博士より御指導を給わった。記して謝意を表する。
- ③⑦ 『大正蔵』五五卷一〇頁下。僧伽提婆訳出として見てみると、この記述が生きてくる。これまでの訳経史の見解では、僧伽跋澄の項の「雜阿毘曇毘婆沙十四卷」を『鞞婆沙論』に当てていたので、僧伽提婆の項にある「鞞婆沙阿毘曇十四卷」は失われたものとされてきた。先に発表した拙論「竺仏念の研究」（三七頁脚註）においても、欠本と見たが、この僧伽提婆の項の「鞞婆沙阿毘曇十四卷」一名広説同 在洛陽訳出こそ現存の『鞞婆沙論』に比定さるべきものであろうと思ふ。

- 湯用彤、前掲書上冊一六四頁。
- 39 『大正藏』二六卷七七頁中—一九一七頁中。
- 40 『大正藏』五五卷一〇頁下。
- 41 湯用彤、前掲書上冊一六四頁。
- 42 拙論「竺法念の研究」二六頁—二七頁。
- 43 『大正藏』二八卷七二頁中—一八〇八頁上。
- 44 『大正藏』五五卷七一頁下—七二頁上。
- 45 前掲拙論二七頁。
- 46 『大正藏』五五卷七一頁中。
- 47 『大正藏』五五卷六四頁中。
- 48 『大正藏』五五卷一〇頁中。
- 49 『大正藏』五五卷一一頁中。
- 50 『大正藏』一卷四二頁上—一八〇九頁上。
- 51 水野弘元「漢訳中阿含と増一阿含との訳出について」(『大倉山学院紀要』第二輯)六九頁—七三頁。『大正藏』の中から二五経を取り出されたが、後に改訂『国訳一切経』(印度撰述部阿含部六)の巻末に新らしく附加せられた「中阿含経解題(補遺)」においては、二四経に改められた。
- 52 『大正藏』四卷一一五頁下—一四五頁中。
- 53 『大正藏』五五卷七一頁中。
- 54 『大正藏』五五卷七一頁中—下。
- 55 前掲拙論二七頁。
- 56 『大正藏』二卷五四九頁中—一八三〇頁中。
- 57 水野博士、前掲論文六三頁、前田恵学『原始仏教聖典の成立史研究』六六九頁等参照。
- 58 前掲拙論二八頁—二九頁。

⑤ 水野博士、前掲論文八二頁―八三頁。『大正藏』から一七経を取り出されたが、後に改訂『国訳一切経』（印度撰述部阿含部八）の「増一阿含経解題（補遺）」において、一八経に改められた。詳細については、水野博士の論文を参照されたい。

二 僧伽提婆の経典翻訳観

前章において、経序等の記録に照して「僧伽提婆伝」を検討してみたのであるが、ここでは、それらの経序等に見られる僧伽提婆の経典翻訳についての考え方を取り出してみよう。先づ彼が中国へ来詣して、最も得意とする阿毘曇八健度論が訳出された際の記録から見つみる。彼はまだ長安へやってきたばかりであって、中国語は片言の会話ぐらいはできたであろうが、自から経典を中国語に翻訳するだけの力もっていなかった。そこで竺仏念が訳出に当るが、その訳出されたものに対し、僧伽提婆は自からの翻訳観に立って、訳し直しをさせる。その訳場に同席していた道安達にも、僧伽提婆の翻訳観がいかなるものであるか、知らされることになった。

釈道安の「阿毘曇序」は阿毘曇八健度論（発智論）の訳出の事情を詳しく述べているが、その中に次のような箇所がある。前章と重複する所もあるが、前後の事情も含めて紹介してみよう。

以建元十九年罽賓沙門僧迦禰婆誦此経甚利、来詣長安。比丘釈法和、請令出之。仏念訳伝。慧力・僧茂筆受。和理其指帰。自四月二十日出、至十月二十三日乃訖。

建元十九年（三八三）、阿毘曇八健度論を誦することが甚だたくみである僧伽提婆が長安に来詣する。道安の法友である釈法和がさっそくこの八健度論の誦出を請う。その請いに応じて誦出がなされ、訳経が始まる。当時長安に

於て經典訳出の第一人者である涼州出身の竺仏念が訳出に当り、慧力と僧茂が筆受し、法和はその指帰を理め、四月二十日から出して十月二十三日に、一応でき上った。

其人檢校、訳人頗雜義辭。龍蛇同淵、金鑰共肆者、彬彬如也。和無然恨之。余亦深謂不可。遂令更出、夙夜匪懈。四十六日、而得尽定。損可損者、四卷焉。

しかるに「其人」、即ち僧伽提婆ができ上った訳文についていろいろ聞いてみると「訳人」、即ち竺仏念は頗る義辭を雜えて訳出していることが判明した。これを知った法和は無然として残念に思い、余、即ち道安も不可といつた。そこで更めて、四十六日、夙夜懈むことなく訳し直して、完成した。四卷けずった。

僧伽提婆が仏念の訳文に対して反対した点は、「頗雜義辭」ということである。この「義辭」ということについて、宇井博士は「説明の言であろう」と^①いっておられる。つまり中国人の訳出者である竺仏念は、恐らく中国人に少しでもよくわかるようにと、原文にない説明の文をつけて訳出したのであろう。これに対し、仏典を重んずると極めて嚴格敬虔なる僧伽提婆は一言でも私意を雜えて訳すことが許せなかつたのである。

既に指摘せられているところであるが、咸安三年（三七三）、涼州において、月支の優婆塞支施崙が手に胡本を執り、帛延が訳に当つた首楞嚴經訳出の訳場にあつて、まのあたり仏典翻訳は「辭旨如本、不加文飾、飾近俗、質近道。文質兼唯聖有之耳」^②ということではなければならぬことを学んできた慧常は、建元十五年（三七九）、比丘大戒が訳出された時、道安があまりに反復の多いのを嫌つて筆受の彼にけずることを命ずると、憤然として席を避けていた。

大不宜爾。戒猶礼也。礼執而不誦。重先制也。慎拳止也。戒乃逕広長舌相三達心制。八輩聖士、珍之宝之、師師相付、一言乖本、有逐無赦。外国持律、其事実爾。此土尚書及与河洛、其文樸質、無敢措手、明祗先王之法言、而順神命也。何至仏戒聖賢所貴、而可改之、以従方言乎。恐失四依不敵之教也。与其巧便、寧守雅正。訳胡為秦、東教之士、猶或非之。願不刊削以従飾也。^④

この確固たる主張に対し、皆、賛同の意を表し、そのように訳出したということがあった。道安は深くそれによつて教えられ、「淡乎無味、乃直道味也」と知った。^⑤

このような厳正なる直訳こそ仏典訳の正道であるとする道安達にとつて、竺仏念訳出の八韃度論が「頗雜義辭」ではどうしても容認できないはずである。僧伽提婆もこの慧常の考えとはほ同じ嚴格敬虔なる仏典訳観をもつていたようである。

僧伽提婆は、暫く中国に滞在するうち、すっかり中国語をマスターしてしまふ。そこで先に長安にて訳出された諸経律論を自から読むことができるようになる。

道慈の「中阿含経序」の言葉は、恐らく僧伽提婆の指摘したところを、そのまま伝えていると思われる。

此諸経律凡百余万言、並違本失旨、名不当実、依悖属辞、句味亦差。良由訳人造次、未善晋言、故使爾耳。

そこで僧伽提婆は遂に法和等の請いに応じて、これら諸経典の改訳を決意し、請われるままに改訳を行った。

廬山にたまたま来遊した僧伽提婆に請うて訳出してもらった『三法度論』に対して、慧遠は「序」を書いてゐる。その「三法度序」^⑥のなかで、次のように述べてゐる。

提婆於是、自執胡經、輒為晉言。雖音不曲尽、而文不害意。依実去華、務存其本。自昔漢興、逮及有晉、道俗名賢、並參懷聖典、其中弘通佛教者、伝訳甚衆。或文過其意。或理勝其辭。以此考彼、殆兼先典、後來賢哲、若能參通晋胡、善訳方言、幸復詳其大帰、以裁厥中焉。

僧伽提婆が「依実去華、務存其本」としたことを称えている。これに対し竺仏念は、「僧伽羅刹集経後記」^⑦によれば、

念、西学通内外、才弁多奇。常疑西域言繁質、謂此土好華、每存瑩飾、文句減其繁長。安公・趙郎、之所深疾。

とあって、僧伽提婆の翻訳観と対立するものがあつたようである。

竺仏念は常に次のように主張していた。西域の言は繁長であるから減じて、そのかわりこの中国では華を好むから瑩飾を与えるのがよいと。道安等はこういう考えに深く心を疾めたという。

直訳がよいか意訳がよいかということは、洋の東西を問わず古くより議論せられてきたところであるが、このことは仏典翻訳についても、古くより議論せられてきた。

僧伽提婆は、私意を雜えない直訳を仏典翻訳の正道とした一人である。

註

① 宇井伯寿『釈道安研究』一四九頁。

② 横超慧日『中国仏教の研究』所収の「中国仏教初期の翻訳論」。

- ③ 未詳作者「首楞嚴後記」(『大正藏』五五卷四九頁中)。
- ④ 釈道安「比丘大戒序」(『大正藏』五五卷八〇頁中)。
- ⑤ 同右。
- ⑥ 『大正藏』五五卷七三頁上。
- ⑦ 『大正藏』五五卷七一頁下。

三 『鞞婆沙論』所引の「中阿含」

經序等の記録によって、僧伽提婆の伝記と彼の翻譯觀を見てきたのであるが、これらの記録として伝えられている記述が、果して僧伽提婆の訳語訳文の上に事実かどうか、両者を照し合わせてみようと思う。

これまで度々紹介してきた道慈の「中阿含經序」によれば、洛陽において中国語をマスターした僧伽提婆は一名、広説ともよばれている『鞞婆沙論』を更出し、それから建康へ行き、隆安元年から翌年にかけて、『中阿含經』を「准之先出、大有不同」とあるように更出したことが知られるのであるが、現存の『鞞婆沙論』には、その巻第一と巻第二において、所引の契經に対し、それぞれ所屬の阿含名が細註によって明記してあるものが見出される。

これを手懸りとして、『鞞婆沙論』所引の「出中阿含」と細註されてある契經と現存『中阿含經』のそれと対応する箇所を照し合わせてみるならば、僧伽提婆によって同じく更出せられたものとすれば、訳語訳文の上に何らかの共通点が見出せるのではなからうか。

もし共通点が見出せるとするならば、「中阿含經序」という外的資料が、僧伽提婆の訳語訳文という内的資料に

よって、その資料的価値と信憑性の高さという点で証明が与えられることとなるであろう。そしてそれは『鞞婆沙論』は勿論のこと、『中阿含経』でも、訳語訳文の上から、僧伽提婆の訳出に間違いないという一つの確証を得ることになるであろう。確証を得えた僧伽提婆の訳語訳文にもとづいて、更に僧伽提婆の他の訳出經典の訳語訳文にまで、その確証は適用できるかどうかとも調査することができよう。

従来、の訳経史研究における経序等の記録に見える經典と現存の經典との比定は、経録等の伝承と経序等の再吟味という以外には、ほとんどその方法を持っていなかった。ここにもし経序等の記録するところを、現存の經典の訳語訳文の上に確認することができれば、それはよし一例にすぎなくても、新しい訳経史研究の一方法を提示することになるであろう。

ここでは、先づ『鞞婆沙論』の巻第一と巻第二において細註によって「出中阿含」と明示してある契経（上段）を取り出して、『中阿含経』等の対応箇所（下段）と対照してみよう。

『鞞婆沙論』所引の「中阿含」

(一) 如契経所説出中阿含諸賢。彼一施報。七生天上
為天王。七生人為人王。^①

(乙) 如所説。諸賢。我已一施報故。七生天上為
天王。七生人為人王。^②

『中阿含経』・(六六) 「説本経」

諸賢。我因施彼一鉢食福。七反生天得為天王。七
反生人復為人王。諸賢。我因施彼一鉢食福得生如
此积種族中……。^③

〔参考〕

失訳『仏説古來世時經』

吾因是德七反生天為諸天王。七反在世人中之尊。^④

(※反||返④)

浮陀跋摩『阿毘曇毘婆沙論』
道泰等訳

如尊者阿泥盧頭説。我以一食施報。七生三十三

天。七生波羅奈國。^⑤

玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』

如彼尊者無滅所説。我由一食異熟因故。七生天上

七生人中。^⑥

(二) 如仏契經説。此鬼長夜無諛諂。無幻質直。設

『中阿含經』・(一三四)「釈間經」

問事者尽欲知故。無觸燒意。此亦如法。我寧可

以甚深阿毘曇授之阿含。^⑦

爾時世尊便作是念。此鬼長夜無有諛詔。亦無欺

誑。無幻質直。若有問者尽欲知故。不欲觸燒。彼

之所問亦復如是。我寧可說甚深阿毘曇。^⑧

〔參考〕

法賢訳『仏説帝釈所問經』

爾時世尊而作是念。帝釈天主於長夜中無懈無廢無

塵無垢。如有所問是真不知非作魔事。彼有所問當

為宣説。^⑨

吉迦夜 雲曜訳 『雜寶藏經』・(七三)「帝釈問事縁」

時仏作是念。帝釈無諛偽。真実問所疑。不為惱

乱我。若汝之所問。我当分別説。^⑩

浮陀跋摩『阿毘曇毘婆沙論』
道泰等訳

又修多羅說。此帝釈長夜其心質直無有詔曲。諸有所問。為了知故不為燒乱。我当以甚深阿毘曇。恣汝所問。¹¹⁾

玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』

如契經說。此藥叉天於長夜中其心質直無有詔誑。諸有所問皆為了知不為燒乱。我以甚深阿毘達磨恣彼意問。¹²⁾

(三) 如仏契經說。梵摩婆羅門長夜無諛詔。無幻質

直。設問者。尽欲知故無觸燒意。此亦如法。我

寧可以甚深阿毘曇授之上。¹³⁾

『中阿含經』・(一六一)「梵摩經」

於是世尊而作是念。此梵志梵摩長夜無諛詔無欺誑。所欲所問者。一切欲知非為觸燒。彼亦如是。我寧可說彼甚深阿毘曇。¹⁴⁾

(四)

如仏契經説。

阿難。縁起甚深明亦甚深

出中阿含^⑩

〔参考〕

玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』

又契經説。此筏蹉氏及善賢外道并梵壽婆羅門。皆

於長夜其性質直無詔無誑。諸有所問皆為了知不為

燒乱。我以甚深阿毘達磨恣彼意問。^⑪

『中阿含經』・(九七) 「大因經」

世尊告曰。阿難。汝莫作是念。此縁起至淺至淺。

所以者何。此縁起極甚深明亦甚深。^⑫

〔参考〕

安世高訳『仏説人本欲生經』

如是因縁。阿難。可知為深微妙。^⑬

竺仏念訳『長阿含經』・(一三) 「大縁方便經」

爾時世尊告阿難曰。止。止。勿作此言。十二因縁法之光明。甚深難解。^⑮

施護訳『仏説大生義經』

爾時世尊告阿難言。如是如是。彼縁生法甚深微妙。^⑯

浮陀跋摩
道泰等訳 『阿毘曇毘婆沙論』

如仏告阿難。此十二因縁法甚深。難解難了難知難見。非思量分別之所能及。唯有微妙決定智者。乃能知之。非汝淺智之所能及。^⑰

玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』

又如仏告阿難陀言。我有甚深阿毘達磨。謂諸縁起。難見難覺不可尋思非尋思境。唯有微妙聡叡智者。乃能知之。²²⁾

(五) 如仏契経説。何故汝愚人盲無目。論甚深阿毘

曇出中²³⁾
阿含。

『中阿含経』・(二二二) 「成就戒経」

世尊面一訶烏陀夷曰。汝愚癡人盲無有目。以何等故論甚深阿毘曇。²⁴⁾

〔参考〕

浮陀跋摩
道泰等訳『阿毘曇毘婆沙論』

如説。愚人無眼。而與上座智慧比丘論甚深義。²⁵⁾

玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』

又如仏告鄢陀夷言。汝是愚夫盲無慧目。云何乃与上座苾芻共論甚深阿毘達磨。⁹⁸

(六) 復如所說。諸所有明慧明說第一。^同⁹⁷

『中阿含經』・(一四一)「喩經」
猶諸光明慧光明為第一。⁹⁸

〔参考〕

浮陀跋摩 『阿毘曇毘婆沙論』
道泰等訳

如説。一切照中慧照最上。⁹⁹

玄奘訳 『阿毘達磨大毘婆沙論』

如契經説。一切照中我説慧照最為上首。¹⁰⁰

(七) 或曰。謂説行本如所説出中阿含迦藍此三行本習。

迦藍食行本習。迦藍悲癡行本習。¹⁰¹

『中阿含經』・(一六)「伽藍經」

伽藍。当知諸業有三因習本有。何云為三。伽藍。

謂食是諸業因習本有。伽藍。悉及癡是諸業因習本有。²²⁾

〔参考〕

浮陀跋摩
道泰等訳 『阿毘曇毘婆沙論』

如説。迦藍摩当知。食是衆生業本。是衆生業集。

恚癡亦是衆生業本。是衆生業集。²³⁾

玄奘訳 『阿毘達磨大毘婆沙論』

如契經説。迦羅摩。当知貪瞋癡三業根本集。²⁴⁾

以上、『韓婆沙論』所引の「中阿含」とそれに対応する『中阿含經』及び参考として他の經論を対照してみたのであるが、『韓婆沙論』所引の「中阿含」と『中阿含經』の訳語訳文がほぼ一致していることが判明した。特に(二)、(三)、(四)、(五)、(六)においては、偶然の一致とは到底考えられない。またどちらか一方が、他方の訳語訳文を採用

したとも考えられない。

「中阿含經序」によれば、『鞞婆沙論』は僧伽提婆が廬山に入る（三九一）より以前に洛陽にて更出し、また『中阿含經』は隆安元年（三九七）から翌年にかけて更出しているのであるから、少くとも約七、八年、『鞞婆沙論』と『中阿含經』の更出には、年数のひらきがある。その年数のひらきを考慮に入れて、両者の訳語訳文がほぼ一致することを考えてみると、同じ訳者、即ち僧伽提婆の訳語訳文であるとしか思えない。

そもそも、『大正藏』第二八卷所収の『鞞婆沙論』には、「符秦罽賓三藏僧伽跋澄訳」となっていて、訳者を僧伽跋澄としているが、これは僧伽提婆更出以前の鞞婆沙論に寄せられた釈道安の「鞞婆沙序」に、

會建元十九年、罽賓沙門僧伽跋澄、諷誦此經四十二処、是戸陀槃尼所撰者也、來至長安。趙郎飢虛在往、求令出焉。其国沙門曇無難提筆受為梵文。弗囟羅刹訳伝。敏智筆受、為此秦言。趙郎正義。起尽自四月出、至八月

二十九日乃訖。^④

とあるのを、『開元釈教録』卷第三において、智昇が、

祐等群録並云、鞞婆沙論僧伽提婆訳。今淮安公論序、云僧伽跋澄訳。今准論序、為正。祐等群録復云、跋澄訳。雜阿毘曇毘婆沙論十四卷者、即鞞婆沙論是也。^⑤

と受けて、釈道慈の「中阿含經序」に「即從提和更出阿毘曇及広説也」とある僧伽提婆による「広説」、即ち『鞞婆沙論』更出についてはまったく考慮せず、僧伽提婆の項から、僧伽提婆更出の『鞞婆沙論』を、

其鞞婆沙十四卷、淮安公序、是跋澄訳。今此除之。^⑥

と云って、除いてしまい、それ以来僧伽跋澄訳とされ、それを『大正藏』においても踏襲しているのである。

所が直前に出した「中阿含経序」の「即從提和更出阿毘曇及広説也」という記述、更に『出三蔵記集』以後、『開元釈教録』以前の諸経録を詳しく検討してみると、舟橋博士や常盤博士も主張せられるように、記録によってさえ、僧伽提婆訳とする方がよいのである。

更に、『鞞婆沙論』所引の「中阿含」と現存『中阿含経』が訳語訳文において先ほど見た如く一致することは、まったく「中阿含経序」の記述の正しいことを証明するものであり、改めて道慈の「中阿含経序」が資料的価値と信憑性の高いものであることを確認できる。また『中阿含経』そのものも、『鞞婆沙論』所引の「中阿含」との訳語訳文の一致によって、間違いなく僧伽提婆訳出のものであることが証明せられるのではなからうか。

ともあれ、経序、経録等の外的資料と経典そのものの訳語訳文という内的資料が互に照し合って、初めて訳経史上の事実が確認できるという一つの手懸りを、ここに報告できたと思う。

なお参考までに『鞞婆沙論』所引の「増一」阿含と現存『増壹阿含経』の対応簡処も紹介しておこう。『歴代三寶紀』等の経録及び近代の学者のうちには、現存の『増壹阿含経』は、『中阿含経』と同じく僧伽提婆によって改訳されたとする見解^④があるが、果して、先に見た「中阿含」の如く、『鞞婆沙論』所引の「増一」阿含は現存の『増壹阿含経』と訳語訳文において一致するであらうか。「中阿含」の場合と同じく『鞞婆沙論』巻第一と巻第二において「出増一」と細註されているもののみを調べてみるが、この「出増一」とあるのは、二か所しか見えないのが残念である。

『韓婆沙論』所引の「增一」阿含

(一) 如是余契經說出增一因二緣發於等見。從他

聞。内正思惟。^②

(※一〇二(明)(宮)(聖))

『增壹阿含經』・有無品第十五(一〇)

聞如是。一時仏在舍衛國祇樹給孤獨園。爾時世尊

告諸比丘。有二因二緣。起於正見。云何為二。受

法教化。内思止觀。是謂比丘有此二因二緣。起於

正見。如是諸比丘当作是學。爾時諸比丘聞仏所

說。歡喜奉行。^④

〔参考〕

『中阿含經』・(二二一)「大拘絺羅經」

復問曰。賢者拘絺羅。幾因幾緣生正見耶。尊者大

拘絺羅答曰。二因二緣而生正見。云何為二。一者

從他聞。二者内自思惟。是謂二因二緣而生正見。

尊者舍黎子聞已歎曰。善哉善哉。賢者拘絺羅。尊

者舍黎子歎已歡喜奉行。^④

『長阿含經』・(九)「衆集經」

復有二法。二因二緣生於正見。一者從他聞。二者
正思惟。^④

鳩摩羅什訳『成実論』

(甲) 又阿難白仏。遇善知識於得道中。則為半
利、亦有道理。所以者何。以二因緣正見得生。一
從他聞。二自正念。仏語阿難。^④

(乙) 善知識者經中説。以二因緣能生正見。一從
他聞法。二自正憶念。所從聞法名善知識。^④

浮陀跋摩『阿毘曇毘婆沙論』
道泰等訳

仏經亦説。有二因二緣發於正見。一從他聞法。二
内正思惟。^④

玄裝訳『阿毘達磨大毘婆沙論』

又如經説。有二因緣。能生正見。一外聞他法音。
二内如理作意。^④

(二) 如余契經説增一四 有四法饒益人。云何為

法。^④ 四。親近善知識。聽善法。内正思惟。次法向

『增壹阿含經』・四諦品第二十五 (二)

聞如是。一時仏在舍衛國祇樹給孤獨園。爾時世尊
告諸比丘。有此四法多饒益人。云何為四。第一法
者當親近善知識。第二者當聞法。第三者當知法。
第四者當法法相明。是謂比丘有此四法多饒益人。
是故諸比丘。當求方便成此四法。如是諸比丘當作
是學。爾時諸比丘聞仏所説。歡喜奉行。^④

〔参考〕

『雜阿含經』・(八四三)

復問舍利弗。謂入流分。何等為入流分。舍利弗白
仏言。世尊。有四種入流分。何等為四。謂親_レ近善
男子。聽正法。内正思_レ惟。法次法向。……_レ仏告舍
利弗。如汝所説。流者謂八聖道。入流分者。有四
種。謂親_レ近善男子。聽正法。内正思_レ惟。法次法
向。入流者。成就四法。……^{②)}

(※男子_二知識_一)

『成実論』

如經中説四大利法。親近善人。聽聞正法。自正憶
念。隨順法行。……^{③)}

『阿毘曇毘婆沙論』

又説。人有四法甚為希有。一親近善知識。二從他聞法。三內正思惟。四如法修行。^④

『阿毘達磨大毘婆沙論』

又契經説。有四法人多有所作。一親近善友。二從他聞法。三如理作意。四法隨法行。^⑤

以上、二箇処のみにしか『鞞婆沙論』に「増一」と細註が施されていないので、これだけでは速断はできないが、少くともこの二例からは、『鞞婆沙論』所引の「中阿含」と『中阿含經』の如く一致することは見出せない。僧伽提婆は、ある程度の訳正を『増壹阿含經』にしたかもしれないが、この二例からは積極的に改訳したということとは見出せない。

それよりもこの『鞞婆沙論』所引の「増一」阿含の(一)の方に、「等見」なる語があることが注意を引く。

この「等見」は、他の対応する經典の訳語では「正見」と訳されていて、巴利の相当箇処においては、*sammatipittin*となっている。つまり、先の拙論において見出した竺仏念特有の「等見型の訳語」の一つである。^⑥『鞞婆沙

論』の他の箇処では、「正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定」^⑧とあってまったく「正見型の訳語」であるのに、何故ここだけに「等見」なる訳語があるのであろうか。

このことについては、いろいろ推定することができるが、現在までに調査した資料にもとづいて、一、二の卑見を述べてみたい。将来新しい資料が見出され、訂正しなければならぬかもしれないが、判明している範囲の資料によって、一応の推定を試みておくのも無駄なことではなからう。

第一番目に考えられることは、現存『鞞婆沙論』は、僧伽跋澄誦出、弗図羅刹訳伝と道安が述べている鞞婆沙論を改訳したものであるから、改訳以前の鞞婆沙論の訳語が取り残されているのではないかということである。

改訳以前の鞞婆沙論は弗図羅刹訳伝であるが、この弗図羅刹は仏護のことであり、建元十八年、『四阿含暮抄解』の訳出に際しては仏念と共に訳を為している。その『四阿含暮抄解』は「等見型の訳語」で訳されており、一例を上げると、「等口・等行・等命、是三键度戒」^⑨という箇処がある。この『四阿含暮抄解』を恐らく改訳したものと思われる僧伽提婆訳出の『三法度論』の対応箇処では、「正語・正業・正命、是三種名戒」となっている^⑩。

この『四阿含暮抄解』の訳出せられた翌年(三八三)に、鞞婆沙論は訳出せられ、道安の「鞞婆沙序」には仏護が訳伝したことになっているが、当然竺仏念も訳出に協力していたと考えられる。とするならば、改訳以前の鞞婆沙論は「等見型の訳語」で訳されていたのであろう。僧伽提婆によって鞞婆沙論は改訳を受けたけれども、この「等見」だけが見逃されたものであろう。「等見」がここに残存することによって、かえって現存『鞞婆沙論』が改訳されたものであることを物語っているとも見られる。

第二番目に考えられることは、では何故この箇処の「等見」のみが見逃がされたのであろうかということである。

この「等見」なる訳語を含む一文は、増一阿舎からの引用契経である。

曇摩難提誦出、竺仏念訳伝の増一阿舎経は、鞞婆沙論の訳出された翌建元二十年（三八四）から建元二十一年にかけて訳出されたが、恐らく僧伽提婆が鞞婆沙論を改訳した頃（遅くとも三九〇年）には、この仏念訳伝の増一阿舎経が、権威あるものとして依用せられていたであろうと思われる。従って、鞞婆沙論改訳に際しても、増一阿舎の引用文は、仏念訳伝の増一阿舎経―それは改訳以前の鞞婆沙論所引の「増一」と同じように訳されている―を採用したのではなからうか。とするならば、「等見」なる訳語のみが見逃がされたのではなく、「増一」阿舎経からの引用文全体が残され、それは改訳以前の鞞婆沙論と増一阿舎経の訳文ということになる。今後の調査研究によって、この考えを変えなければならぬかもしれないが、一応以上のように推定しておく。

なお現存『鞞婆沙論』には、契経として「雑阿舎」もよく引かれているが、当面の課題とは直接関係しないから、ここでは取り上げない。勿論、この『鞞婆沙論』所引の「雑阿舎」と現存『雑阿舎経』の訳語訳文は一致しない。

註

- ① 『大正蔵』二八卷四一七頁中。
 ② 『大正蔵』二八卷四二七頁中。

- ③ 『大正蔵』一卷五〇九頁上。cf. Therag. 910—919.
- ④ 『大正蔵』一卷八二九頁下。
- ⑤ 『大正蔵』二八卷三頁中—下。
- ⑥ 『大正蔵』二七卷三頁下—四頁上。
- ⑦ 『大正蔵』二八卷四一七頁中。
- ⑧ 『大正蔵』一卷六三四頁下。DN. II. P. 275.
- ⑨ 『大正蔵』一卷二四八頁上。
- ⑩ 『大正蔵』四卷四七七頁上。
- ⑪ 『大正蔵』二八卷三頁上。
- ⑫ 『大正蔵』二七卷二頁下—三頁上。
- ⑬ 『大正蔵』二八卷四一七頁中—下。
- ⑭ 『大正蔵』一卷六八八頁下。
- ⑮ 『大正蔵』二七卷三頁上。
- ⑯ 『大正蔵』二八卷四一七頁下。
- ⑰ 『大正蔵』一卷五七八頁中。
- ⑱ 『大正蔵』一卷二四二頁上。宇井博士は『訳経史研究』（三九頁）において、この箇所を「是意是微妙」に当てていら

れる。

- ⑲ 『大正蔵』一卷六〇頁中。DN. II. P. 55.
- ⑳ 『大正蔵』一卷八四四頁中。
- ㉑ 『大正蔵』二八卷三頁上。
- ㉒ 『大正蔵』二七卷三頁上。
- ㉓ 『大正蔵』二八卷四一七頁下。
- ㉔ 『大正蔵』一卷四五〇頁上。AN. III. P. 194.

- ②⑤ 『大正蔵』二八卷三頁上。
 ②⑥ 『大正蔵』二七卷三頁上。
 ②⑦ 『大正蔵』二八卷四一八頁上。この文末にある細註の「同上」は、前を受けているので、『鞞婆沙論』の本文の前の引用契経を見ても「出雜阿含」とある。従ってこの契経も「出雜阿含」となるわけであるが、現存『雜阿含経』には「諸星月為最、諸明日為最」（『大正蔵』二卷三七頁中）また「別訳雜阿含経」には「一切明中日光為第一」とあっても、この『鞞婆沙論』に対応する箇処が見出せず、『中阿含経』に対応する箇処があるから、この契経は「出中阿含」の一経としてここで取り扱うこととする。
- ②⑧ 『大正蔵』一卷六四七頁下。
 ②⑨ 『大正蔵』二八卷三頁下。
 ③① 『大正蔵』二七卷四頁中。
 ③② 『大正蔵』二八卷四二三頁上。
 ③③ 『大正蔵』一卷四三八頁下。
 ③④ 『大正蔵』二八卷一八八頁上。
 ③⑤ 『大正蔵』二七卷二四二頁中—下。
 ③⑥ 『大正蔵』二八卷四一六頁上。
 ③⑦ 『大正蔵』五五卷七三頁下。
 ③⑧ 『大正蔵』五五卷五一—頁上。
 ③⑨ 『大正蔵』五五卷五一—頁中。
 ④① 舟橋一哉「尸陀槃尼の鞞婆沙編纂の形式と其の支那伝訳に就いて」（『大谷学報』第十五卷第三号、一六〇頁—一六四頁）
 ④② 常盤大定『後漢より宋齊に至る訳経総録』八三三頁。
 ④③ 『歴代三宝紀』卷第七東晋の僧伽提婆の項（『大正蔵』四九卷七〇頁下）、水野弘元「漢訳中阿含と増一阿含との訳出について」（『大倉山学院紀要』第二輯、九〇頁）、改訂『国訳一切経』（印度撰述部阿含部八）所収の水野弘元「増一阿含経解題（補遺）四二四頁等参照。

④2 『大藏經』二八卷四一七頁上。

なお『大正藏』所収の『轉婆沙論』では、この引用契經の最初のところが「一因二縁」となっているが、『大正藏』の脚註に指示してある明・宮・聖の諸本、『增老阿含經』、『中阿含經』、『長阿含經』の対応箇処の如く、「二因二縁」とするか、『成実論』、『阿毘達磨大毘婆沙論』の対応箇処の如く、「二因縁」とする方がよいであろう。巴利の『増支部』、『中部』では、「二縁」(dvepacayā)となっている。また「二因二縁」というのは、二因と二縁でなく「二因縁」、「二縁」の意味であろう。

④3 『大正藏』二卷五七八頁上。AN. I. p. 87.

④4 『大正藏』一卷七九〇頁下—七九一頁上。MN. 43 (I. p. 294).

④5 『大正藏』一卷五〇頁上。

④6 『大正藏』三二卷二四七頁下。

④7 『大正藏』三二卷三五一頁中—下。

④8 『大正藏』二八卷二頁中。

④9 『大正藏』二七卷二頁中。

⑤0 『大正藏』二八卷四一七頁上。

⑤1 『大正藏』二卷六三一頁中。

⑤2 『大正藏』二卷二一五頁中。SN. V. p. 347.

⑤3 『大正藏』三二卷二五〇頁下。

⑤4 『大正藏』二八卷二頁中。

⑤5 『大正藏』二七卷二頁中。

⑤6 拙論「竺仏念の研究」一一頁、二六頁—二七頁参照。

⑤7 『大正藏』二八卷四七五頁中、四八四頁下、四八五頁上、下。

⑤8 『大正藏』二五卷四頁上。

⑤9 『大正藏』二五卷一八頁中。

四 僧伽提婆の訳語

前に発表した拙論において、訳語調査のために、安世高より鳩摩羅什に至るまでに訳出された經典のうちから、經序等の記録によってほぼ間違いない訳者・訳出年・訳出事情を確認できる現存の經典を選び出しておいた。^①

それらの經典から、法数の品名訳語を調査して、僧伽提婆が用いた訳語の一斑と他の訳出者たちとの關係を調べてみよう。

四諦と四無量

四諦訳語表

經典名	卷大正藏數	訳者名	訳出年	品名	訳語	大正藏、頁段
大安般守意經	(15)	安世高	一四一—一四六	苦、習、尽、道	一六下。	
陰持入經	(15)	安世高	一四一—一四六	苦、習、尽、道	一七下、一七九中、一八〇中。	
四諦經	(1)	安世高	一四一—一四六	苦、習、尽、道	八四下、八六上。	
轉法輪經	(2)	安世高	一四一—一四六	苦、習、尽	五〇中、下。	
道行般若經	(8)	支婁迦讖	一七九	苦、習、尽、導	四〇上。	
阿闍世王經	(15)	支婁迦讖	一四一—一四六	苦、習、尽、導	四〇上。	
文殊師利問菩薩瓔珞經	(14)	支婁迦讖	一四一—一四六	苦、習、尽、導	四〇上。	
阿闍世王經	(11)	支婁迦讖	一四一—一四六	苦、習、尽、道	四〇上。	
成具光明定意經	(15)	支婁迦讖	一六—一六六	苦、習、尽、道	四〇上。	

四無量記語表

經典名	卷大正藏 數	訳者名	訳出年	品名 訳語	大正藏、頁段
大安般守意經	(15)	安世高	一四一〇		
陰持入經	(15)	安世高	一四一〇		
道地經	(15)	安世高	一四一〇		
四諦論	(1)	安世高	一四一〇		
轉法輪經	(2)	安世高	一四一〇		
道行般若經	(8)	支婁迦識	一四一〇		
阿闍世王經	(15)	支婁迦識	一四一〇		
文殊師利問菩薩署經	(14)	支婁迦識	一四一〇		
阿闍世王經	(15)	支婁迦識	一四一〇		
法鏡經	(12)	支婁迦識	一四一〇		
成具光明定意經	(15)	支婁迦識	一四一〇		
太子瑞應本起經	(4)	康孟詳	一四一〇		
菩薩本業經	(10)	支婁迦識	一四一〇		
梵摩渝經	(1)	支婁迦識	一四一〇		
私呵味經	(14)	支婁迦識	一四一〇		
義足經	(4)	支婁迦識	一四一〇		
阿難四事經	(14)	支婁迦識	一四一〇		
八師事經	(14)	支婁迦識	一四一〇		
大明度經	(8)	支婁迦識	一四一〇		
四願集經	(17)	支婁迦識	一四一〇		
六度集經	(3)	康僧會	一四一〇		

僧提伽婆の研究

胎 經	斷 結 經	菩 薩 瓔 珞 經	出 曜 經	中 阿 含 經	阿 毘 曇 心 論	三 法 度 論	阿育王息壤目因緣經	轉 婆 沙 論	增 壹 阿 含 經	僧 伽 羅 利 所 集 經	尊 婆 須 蜜 菩 薩 所 集 論	阿 毘 曇 八 犍 度 論	鼻 奈 耶	四 阿 含 暮 抄 解	普 曜 經	法 句 譬 喻 經	賢 劫 經	漸 備 一 切 智 德 經	光 讚 經	正 法 華 經	
(12)	(10)	(16)	(4)	(1)	(28)	(25)	(50)	(28)	(2)	(4)	(28)	(26)	(24)	(25)	(3)	(4)	(14)	(10)	(8)	(9)	
竺 仏 念	竺 仏 念	竺 仏 念	竺 仏 念	僧 伽 提 婆	僧 伽 提 婆	僧 伽 提 婆	竺 仏 念	僧 伽 提 婆	竺 仏 念	竺 仏 念	竺 仏 念	竺 仏 念	竺 仏 念	竺 仏 念・仏 護	竺 法 護	法 炬・法 立	竺 法 護	竺 法 護	竺 法 護	竺 法 護	
三九九一	三九九一	三九九一	三九九	三九一〇一	三九二	三九一	三九一	三九一〇六	三八五	三八五	三八四	三八三	三八三	三八二	三〇八	二九一〇六	三〇〇	二九七	二八六	二八六	
慈、悲、喜、捨	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、捨	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、哀、喜、護	慈、悲、喜、護	慈、悲、喜、護	
一〇三下、一〇六下、一〇五中。	九六中、九一中、一〇〇下、一〇一上、一〇三上、一〇三中、一〇七上、一〇四上、一〇四下、一〇五下。	二上、五下、三下、七中、七上、中、二〇中。	七四下。	四三上、中、中一下、下、四四上、中、五六上、etc。	六中。	三四上。	四四上、中、中一下、四四中、四四下、etc。	三三上、三七上一中、三六中、一三上。五下、六九下、六六下、六四中、六七下、六九上、七九上。	八六下、八七下、八九中、八九下。	八七下、八九上、八九上一中。	二上。	四七下、五六中、五三上、四九下。	四六下、五六中、五三上、四九下。	四六下、五六中、五三上、四九下。	四六下、五六中、五三上、四九下。	四六下、五六中、五三上、四九下。	四六下、五六中、五三上、四九下。	四六下、五六中、五三上、四九下。	四六下、五六中、五三上、四九下。	四六下、五六中、五三上、四九下。	四六下、五六中、五三上、四九下。

中陰經	竺一仏念	三九九一	慈、悲、喜、捨	一〇六中。
小品般若經	鳩摩羅什	四〇四	慈、悲、喜、捨	三〇中、下、二五下、二六上、二七上、二七上、三六上、三六下、三六中、三六下、三六下、etc.
成實論	鳩摩羅什	四〇八	慈、悲、喜、捨	五九上、五九中、五九下、五九下。
長阿含經	竺仏念	四一二	慈、悲、喜、捨	三〇中、三三上。
		四一三	慈、悲、喜、捨	三三下、四三中、四下、五〇下、一〇七。

四諦と四無量の二つの訳語表を一見して気付くことは、四諦は安世高以来、「苦・習・尽・道」と訳されてきたのであるが、僧伽提婆は『阿毘曇心論』において、従来見られない「苦・習・滅・道」と「尽」(nirodha)を「滅」なる訳語でもって訳し、また四無量は支謙以来、「慈・悲・喜・護」と訳されてきたのであるが、これも僧伽提婆は『中阿含經』において「慈・悲・喜・捨」と「護」(upeksā)に対し「捨」なる訳語を当てている。

既に見てきた如く、僧伽提婆は数年間中国に滞在するうちに、中国語をマスターし、『鞞婆沙論』等の改訳を試み、だんだん旧来の訳語に疑問をもち、彼独自の訳語をもって訳すようになったのであろう。この僧伽提婆の「苦・習・滅・道」、「慈・悲・喜・捨」は、鳩摩羅什も用いているところを見ると、羅什はこれらの僧伽提婆の訳語を高く評価したのではなからうか。旧来の訳語である「苦・習・尽・道」、「慈・悲・喜・護」を踏襲してきた竺仏念も、羅什が僧伽提婆の訳語を採用したからであろうが、『胎経』では「苦・集・滅・道」、「長阿含經」では「苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦出要諦」なる訳語が認められる。

五 陰

五 陰 訳 語 表

經 典 名	大正藏 卷数	訳 者 名	訳 出 年	品 名 訳 語	大 正 藏、頁 段
大安般守意經	(15)	安世高	一〇一—一〇六	色、痛痒、思想、生死、識	一六中。
陰持入經	(15)	安世高	一〇一—一〇六	色、痛、想、術、識	一七中。
道地經	(15)	安世高	一〇一—一〇六	色、痛痒、思想、行、識	三三中—下。
四諦經	(1)	安世高	一〇一—一〇六	—	—
轉法輪經	(2)	安世高	一〇一—一〇六	—	—
道行般若經	(8)	支婁迦讖	一七九	色、痛痒、思想、生死、識	四六上、四六中、四六中、四六上、四六中、四六中、下、四七一上、四七五中。
阿闍世王經	(15)	支婁迦讖	一〇一—一〇六	色、痛痒(㊦㊧癢)、思想、生死、識	四五下。
文殊師利問菩薩誓經	(14)	支婁迦讖	一〇一—一〇六	—	—
阿閼伽國經	(11)	支婁迦讖	一〇一—一〇六	—	—
成具光明定意經	(15)	支婁迦讖	一〇一—一〇六	—	—
法鏡經	(12)	安玄・嚴仏	一六一—一六八	—	—
中本起經	(4)	康孟詳	一〇一—一〇六	—	—
太子瑞応本起經	(3)	支婁迦讖	三三—三五	色像、痛痒(㊦㊧癢)、思想、行作、魂識	四六中。
菩薩本業經	(10)	支婁迦讖	三三—三五	—	—
梵摩渝經	(1)	支婁迦讖	三三—三五	—	—
私呵昧經	(14)	支婁迦讖	三三—三五	—	—
義足經	(4)	支婁迦讖	三三—三五	—	—
阿難四事經	(14)	支婁迦讖	三三—三五	—	—

五境・六境

五境・六境訳語表

經典名	卷大正藏数	訳者名	訳出年	品名訳語	大正藏、頁段
大安般守意經	(15)	安世高	一〇一—一〇七	色、声、香、味、細滑	一六五中—下、一七〇中。
陰持入經	(15)	安世高	一〇一—一〇七	色、声、香、味、觸、法	一七〇中。
道地經	(15)	安世高	一〇一—一〇七		
四諦經	(1)	安世高	一〇一—一〇七		
轉法輪經	(2)	安世高	一〇一—一〇七		
道行般若經	(8)	支婁迦讖	一七九		
阿闍世王經	(15)	支婁迦讖	一〇一—一〇七	色、声、香、味、細滑、法	三九〇中。
文殊師利問菩薩瓔珞經	(14)	支婁迦讖	一〇一—一〇七		
阿闍世王經	(11)	支婁迦讖	一〇一—一〇七		
成具光明定意經	(12)	安玄・嚴仏	一六〇—一六九	色、声、香、味、細滑	一七下、三〇中—下。
法鏡經	(12)	安玄・嚴仏	一六〇—一六九		
中本起經	(4)	康孟詳	一〇一—一〇七		
太子瑞応本起經	(3)	支謙	三三—三五		
菩薩本業經	(10)	支謙	三三—三五		
梵摩渝經	(1)	支謙	三三—三五		
私呵味經	(14)	支謙	三三—三五		
義足經	(4)	支謙	三三—三五		
阿難四事經	(14)	支謙	三三—三五		
八師經	(14)	支謙	三三—三五		

菩薩瓔珞經	出曜經	中阿含經	阿毘曇心論	三法度論	阿育王息壞目因緣經	鞞婆沙論	增老阿含經	僧伽羅刹所集經	尊婆須蜜菩薩所集論	阿毘曇八犍度論	鼻奈耶	四阿含暮抄解	普曜經	法句譬喻經	賢劫經	漸備一切智德經	光讚經	正法華經	六度集經	四明願經	大明度經	
(16)	(4)	(1)	(28)	(25)	(50)	(28)	(2)	(4)	(28)	(26)	(24)	(25)	(3)	(4)	(14)	(10)	(8)	(9)	(3)	(17)	(8)	
竺仏念	竺仏念	僧伽提婆	僧伽提婆	僧伽提婆	竺仏念	僧伽提婆	竺仏念	竺仏念	竺仏念	竺仏念	竺仏念	竺念・仏護	竺法護	法炬・法立	竺法護	竺法護	竺法護	竺法護	康僧會	支謙	支謙	
三九一	三九九	三六一四二	三九二	三九一	三九一	三六一三〇	三八五	三八五	三八四	三八三	三八三	三八二	三〇八	二九〇一三〇	三〇〇	二九七	二八六	二八六	三三一三〇	三三一三〇	三三一三〇	
色、声、香、味、細滑、法	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、触、法	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑、法	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑、法	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑、所欲法	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑	色、声、香、味、細滑	
三四中、六中。	六三中、六九上、六五中、六五中、六七上、七〇上、七〇上、etc。	六〇上、六九中、七五上、七七上。	三三、五中、元上—中。	四六下、四九中。	四七上、四八上、中。	二四下。	五〇下、三四中、六二上、六九中。	七四上、下、七七上。	七五下、七九上。	二四下。	八六上。	四八下、四九中、五〇中。	八下、一〇下。	四八下、四九中、五〇中。	四八下、四九中、五〇中。	四八下、四九中、五〇中。	四八下、四九中、五〇中。	四八下、四九中、五〇中。	四八下、四九中、五〇中。	四八下、四九中、五〇中。	四八下、四九中、五〇中。	四八下、四九中、五〇中。

断 結 經	胎 陰 經	中 品 般 若 經	大 品 般 若 經	小 品 般 若 經	成 實 論	長 阿 含 經
(10)	(12)	(12)	(8)	(8)	(2)	(1)
竺 仏 念	竺 仏 念	竺 仏 念	鳩 摩 羅 什	鳩 摩 羅 什	鳩 摩 羅 什	竺 仏 念
三九九一	三九九一	三九九一	四〇四	四〇八	四一二	四一三
色、声、香、味、細滑、法	色、声、香、味、細滑、法	色、声、香、味、細滑、法	色、声、香、味、触、法	色、声、香、味、触	色、声、香、味、触、法	色、声、香、味、触、法
一〇七下、 九六中、 九二下。	一〇九上、 九七中、 九三下、 九二下。	三三下、 三三上、 下、 三三下、 三五上、 etc。	五八中、 五三上。	三五中、 三〇中。	六下、 五下、 五上。	

更に五境または六境であるが、安世高以来「色・声・香・味・細滑」または「色・声・香・味・細滑・法」と訳され、*sparśa* を「細滑」としてきた。尤も現在の『陰持入經』では、「更」または「触」と見えるが、竺仏念に至るまで、「細滑」が大勢を占め、『陰持入經』に「更」または「触」とあることが不自然にさえ感ぜられる。

所が『中阿含經』においては、僧伽提婆は「触」なる訳語を用い、これも羅什の採用するところとなり、竺仏念も『胎經』以後においては、これを踏襲している。

七 覺 支

七 覺 支 訳 語 表

經典名	卷大正藏	記者名	訳出年	品名訳語	大正藏、頁段
大安般守意經	(15)	安世高	一四一—一六七	念覺意、法分別觀覺意、精進覺意、 愛可覺意、捨覺意、定覺意、識覺意	一七四中。
陰持入經	(15)	安世高	一四一—一六七		
道地經	(15)	安世高	一四一—一六七		
四諦論	(1)	安世高	一四一—一六七		
轉法輪	(2)	安世高	一四一—一六七		
道行般若經	(8)	支婁迦讖	一七九		
阿闍世王經	(15)	支婁迦讖	一四一—一八九		
文殊師利問菩薩署經	(14)	支婁迦讖	一四一—一八九		
阿閼佉國經	(11)	支婁迦讖	一四一—一八九		
成具光明定意經	(15)	支婁迦讖	一六—一八九		
法鏡經	(12)	支婁迦讖	一六—一八九		
太子瑞應本起經	(4)	康孟詳	一六—一三〇		
菩薩本業經	(3)	支婁迦讖	三三—一三五		
梵摩渝經	(1)	支婁迦讖	三三—一三五		
私呵味經	(14)	支婁迦讖	三三—一三五		
義足事經	(4)	支婁迦讖	三三—一三五		
阿難四事經	(14)	支婁迦讖	三三—一三五		
八師事經	(14)	支婁迦讖	三三—一三五		
大明願度經	(8)	支婁迦讖	三三—一三五		
四願度經	(17)	支婁迦讖	三三—一三五		
六度集經	(3)	康僧會	三三—一三五		

中 陰 經	大 品 般 若 經	鳩 摩 羅 什	三 九 九	念 覺 分、 捨 覺 分、 除 覺 分、 定 覺 分、 捨 覺 分	三 五 下、 三 四 下。
小 品 般 若 經	鳩 摩 羅 什	四 〇 八	念、 捨 法、 精 進、 喜、 捨、 定、 捨	三 五 上、 三 七 上。	
成 實 論	鳩 摩 羅 什	四 一 二	念 覺 意、 法 覺 意、 精 進 覺 意、 喜 覺 意、 捨 覺 意、 定 覺 意、 護 覺 意	三 七、 三 中、 三 中、 三 上— 中、 三 下。	
長 阿 含 經	竺 佛 念	四 一 三	捨 覺 意	三 〇 中。	

七覺支のうちの *upekṣā-sambodhy-āṅga* は、從來、「護」と訳されてきたが、『中阿含經』において、僧伽提婆は「捨」と訳し、羅什もこれを採用している。このことは、四無量のうちの *upekṣā* とまったく同じように対応しているが、ただ竺仏念は『長阿含經』においても、「護覺意」と訳し、羅什が「捨」を用いても、旧来の訳語を使うことを変えなかった。

以上を通観していえることは、僧伽提婆は『阿毘曇心論』訳出より『中阿含經』訳出に至って、彼独自の訳語を試みていることが注目される。これらの訳語は、羅什の採用するところとなり、羅什の華々しい訳経活動から考えて、羅什が初めて訳しだしたかの如く見られるが、僧伽提婆の訳語から適切であると思う訳語を、どんどん羅什が依用したと見る方が良いように思われる。

このように見ることができれば、羅什にとって僧伽提婆はかなり重要な訳経上の位置を占めることになる。

これらの点については更に訳語の調査が進められ、検討が加えられねばならないが、ともあれ、僧伽提婆にはかなり新造の訳語を見出しうる点が注意せられる。

註

① 拙論「竺仏念の研究」一二頁―二五頁。

結

以上、「僧伽提婆伝」の検討、彼の翻訳観、『韓婆沙論』所引の「中阿舎」と僧伽提婆訳出の『中阿舎経』との対照による僧伽提婆所訳の經典の確認、僧伽提婆の訳語の一斑の瞥見を試みてみた。

これまで度々述べてきたことであるが、訳経史の研究は、経序等の外的資料の十分なる吟味検討にもとづき、更に經典そのものの訳語訳文の調査によって、経序等の記述が事実かどうか確認することができて、初めて全うされる。

然るに訳語訳文の調査は、細心の注意と根気を要する仕事である。しかも、すべての調査を経てからでなくては、正しい結果は報告できない。また漢訳仏典のみでなく、梵・藏・巴等の經典との比較対照も当然要求されてくる。かく考えてくると、本論文においては訳語調査といっても、大蔵経という大海中の一滴のみを瞥見したにすぎぬことに、筆者自身、不十分なることを痛感している。今後、更に訳語調査を進めて、訳経史の研究という課題と

取り組みたい。

本論文においては、『鞞婆沙論』巻第一と第二所引の「中阿含」と現存『中阿含経』の訳語訳文がほぼ一致することを知ることができたのが、せめてもの筆者にとっての慰めである。

(七一・三・三一)

〔本論文は昭和四十五年度同朋大学研究費助成による研究成果の一部である〕